

登龍門通信

博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）

No. 7 / April 10th, 2017

登龍門 第4期生入校式

社会で幅広く活躍するための第一歩を踏み出す

2016年10月4日（火）、野依記念学術交流館においてPhDプロフェッショナル登龍門第4期生の入校式が開催されました。新履修生は日本、中国、モンゴル、インド、ジャマイカ、ナイジェリア出身の6カ国、15名（男性10名、女性5名）で構成されています。インド、ジャマイカ、ナイジェリア出身の履修生は登龍門プログラム開始以来初めての受け入れとなり、彼らが本プログラムに与える影響力にも注目が集まっています。また、履修生が所属する研究科も理学、工学、医学系、情報科学、文学、法学、教育発達科学、国際開発、国際言語文化*と多岐にわたり、多様性に満ちたオールラウンド型プログラムにふさわしい環境が備わっています。

式典には松尾清一総長、前島正義副総長（プログラム責任者）、杉山 直・理学研究科教授（プログラムコーディネーター）および本プログラム関係者が参加したほか、学外プログラム担当者ならびに国際アドバイザリーボードの皆さまにもご臨席いただきました。前島副総長による開会の挨拶につづき、第4期生が一人ずつ紹介され、国際アドバイザリーボードの赤坂清隆・公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長、学外プログラム担当者の川口文夫・中部電力株式会社顧問、筒井宣政・東海メディカルプロダクツ会長よりお祝いの言葉をいただきました。その後、第4期生を代表し、工学研究科の今井幸司君、教育発達科学研究科の胡 安琪さんによる挨拶が行われ、プログラム参加への熱い思いが伝わってきました。そして、松尾総長による閉会の挨拶で締めくくられました。

履修生には本プログラム活動を通じ、所属研究科で獲得する高度な専門性を産官学の枠を超えた社会の幅広い分野で応用できる能力を養い、急速かつ複雑に変貌を遂げつつあるグローバル社会で活躍できる人材に育てほしいと願っています。

* 研究科の名称は2016年10月4日現在

（野口道代）



第4期生初年次研修 カンボジアの過去と現在を学び未来を考える



2016年10月に入校した第4期生の初年次研修を、10月8日（土）から18日（火）まで近年著しい経済発展を遂げているカンボジアで実施しました。今回の研修テーマは「カンボジアの現在、過去、未来」で、カンボジアの過去（アンコール王朝、内戦・虐殺など）と現在（社会基盤の整備、経済発展、成長の歪みなど）を学び、20年後のカンボジアのあるべき姿を描き、そこに至る道筋を提言することを履修生への課題としました。これまで本プログラムが実施してきた海外研修と同様に、今回の研修においても現地参加のカンボジア人学生と入校直後でお互いをよく知らない本プログラム履修生がグループを組み、グループごとに上述の課題に取り組みしました。

10月8日に中部国際空港セントレアを飛び立った一行はベトナムのハノイ経由でシムリアップに到着し、ここでは有名なアンコールワットをはじめとするアンコール遺跡群や国立博物館および内戦中に埋設された地雷を展示した地雷博物館を訪問して、まずはカンボジアの過去を学びました。また、コンボン・プルックというトンレサップ湖畔の貧しい村への訪問では、バスからボートに乗り換え、雨季で一面に冠水した農地を進んだ先に水上高床式の家が並ぶ様子を見て、日本とは大きくかけ離れた、カンボジアの別の一側面を学ぶことができました。

10月10日には首都プノンペンに移動し、翌11日からカンボジア日本人材開発センター（CJCC）をメイン会場とするプノンペンでのプログラムが始まりました。

まずはこの日から合流するカンボジア人学生とのアイスブレイキングワークショップで緊張をほぐし、ひきつづいて開講式、Chan Roath・カンボジア教育省科学研究所長によるカンボジアの未来のための教育、鴨志田尚昭・日本大使館参事官によ



る日本とカンボジアとの関係といった2件の基調講演を受講しました。午後は橋本孝之・日本アイ・ビー・エム副会長によるトップリーダートーク、そしてカンボジア人実業家 Sotheara 氏が経営する豪華なサービスアパートに移動し、同氏から事業の内容や事業に対する考え方、ポルポト時代を生き抜いた氏の半生に至るまで幅広いお話をうかがいました。さらに、建物屋上でプノンペンの夜景を楽しみながらの歓迎パーティーがつづき、この一日だけでとても盛りだくさんの行程でした。

このような強行スケジュールにもかかわらず、一連の講演や講義では履修生が活発に質問を行い、時間が足りないため司会者が途中で打ち切らなくてはならない状況でした。

プノンペン2日目以降もプログラムは進んでいきます。カンボジアの現在と未来に関して、政府の視点から H.E. Im Sour・カンボジア開発評議会（CDC）副次官、民間の視点から Dr. Bun Mony・Sathapana 銀行CEO 兼カンボジア日本経営者同友会（CJBI）議長による講義、ポルポト時代の犯罪者を裁くカンボジア特別法廷の裁判官からの聞き取り、ポルポト時代の捕虜収容所だったトゥール・スレン博物館への訪問、独立行政法人国際協力機構（JICA）の民法・民事訴訟法普及プロジェクトを訪問しての名古屋大学出身カンボジア人弁護士2名による講義、巨大で高級感



あふれる富裕層でにぎわうイオンモールと、普通のカンボジア人の買い物場所のセントラルマーケットの訪問、プノンペン経済特区 (PPSEZ) と特区内にある日系企業、住友電装とデンソーの工場見学、カンボジア人企業家訪問、UNDP オフィス訪問など、とにかく盛りだくさんです（注：一部の訪問は二手に分かれて訪れているため、全員が全行程に参加しているわけではありません）。

履修生はこれらの訪問、講義、ヒアリングで得た知識をもとにグループ内で活発な討議を行い、10月14日夕刻にこれまでの取り組み状況と今後のとりまとめ方針を説明する中間発表を行いました。そこでの質問やコメントを受けて、追加調査や一部のグループでは方針転換も行い、それぞれ悩みながらもまとめあげ、16日午後の最終発表会を迎えました。

最終発表会には日曜日にもかかわらず、講義をご担当いただいた多くの講師や訪問先の方々がゲストとしてわざわざお越しくださり、驚きとともに感謝の念に堪えませんでした。

履修生の発表はグループごとに行われ、道路を中心とした交通インフラ整備、電力の整備、観光開発、eラーニングをそれぞれ主題とした力作でした。さらに質疑応答では、上述の講師や訪問先の方々が積極的にコメントや質問をしてくださったため、活発で意義のある発表会となりました。発

表後はゲストと杉山 直・理学研究科教授から総合的な講評をいただき、修了証書と名古屋大学、CJCC 双方からの記念品の贈呈、記念撮影、それにフェアウェルパーティーとつづいて研修のクライマックスが終了しました。

翌日はカンボジア滞在最終日で、午前中は全員でポルポト時代の虐殺現場であるキリングフィールドを訪問し、その後はグループごとに市内で買い物などを楽しんで、夕刻帰国の途につきました。

専門も国籍も異なる、これまで会ったこともない学生同士がグループを組み、自分の専門とは全く関係ない大きな課題を与えられ、一杯に詰まった日程で時間的余裕もないなか、とにかくグループ内で意見をまとめ、発表に至るこの作業は、履修生にとって大変なことだったと思います。と同時に、この経験が、今後の登龍門活動の出発点として大いに生きてくるはずです。皆さん、ご苦労様でした。

（勝田幸秀）



6リーディング シンポジウム

現在、名古屋大学には、我々の「PhD
プロフェッショナル登龍門」を含めて6つ
の博士課程教育リーディングプログラムが
あります。2016年11月23日（水）、これ
らリーディングプログラムによる合同シン
ポジウムが開催されました。

まずは、名取はにわ・元内閣府男女共同
参画局長と武田一哉・情報科学研究科教授
による基調講演が行われ、その後、本シン
ポジウムのハイライトであるグループディ
スカッションが行われました。ここでは6
リーディングプログラム所属の履修生たち
が、「名古屋大学における大学院教育の将
来像」というテーマのもと、さまざまなト
ピックごとにグループに分かれ議論しまし
た。登龍門プログラムからも5名の履修生
が参加し、同じ名古屋大学に所属しつつも
普段は交流のない異なるプログラムの学生
と非常に意欲的に情報共有や意見交換をし
ていたのが印象的でした。

その後、各グループでのディスカッショ
ンのまとめがグループプレゼンテーション
として発表されました。限られた時間で
行うには難しいトピックでしたが、それぞ
れのプログラムで得た経験や知識をもとに
、どのグループも学生らしいフレッシュな提
案であり、そして何より、このシンポジウ
ムを通じてプログラムの垣根を越えたつな
がりやが築かれたことを十分感じさせてく
れる内容でした。

（田代寛之）



第3期生発表会

第3期生発表会が2017年1月11日（水）
に豊田講堂シンポジオンホールで行われま
した。「自分が考えるリーダー像」、「登龍
門プログラムで学んだこと」、「今後のキャ
リア」をまとめるものです。本プログラム
では、履修生が企業や官公庁などのメン
ターのもとで指導いただく「社会人メン
ター」という制度を設けていますが、本発
表会はそれに先立つ企業や官公庁の方々
との顔合わせを兼ねています。

開会のあいさつとして、前島正義副総長
から、ウルグアイのムヒカ大統領の話を用
いて、履修生への期待を込めたお言葉を
いただきました。履修生の発表は、総勢
19名にわたります。

かいつまんで発表内容を記します。リー
ダー像では、物理の要素になぞって論じた
理系の履修生がいました。トップリーダ
ークの講師を例に出してリーダー像を論
じた履修生もいました。登龍門で学んだこ
とでは、多くの経験や異なる研究科の履
修生との交流が履修生全員に共通してい
ました。キャリアの展望について、多くの
履修生はまだ煮詰まっていないようでした
。そのようななかでも、自国にもどって市場
経済に専門を生かしたいという留学生がい
ました。

履修生の発表が終わり、松尾清一総長か
ら総評がありました。今後の期待をもっ
ているということで締めくくられました。

（高橋裕平）



平成28年度登龍門シンポジウム

「平成28年度シンポジウム 社会に羽ばたく博士人材の育成－博士人材のキャリアパス支援」が、2017年2月16日(木)に名鉄ニューグランドホテルで開催されました。本シンポジウムは前年度の「博士人材の育成手法の評価方法論」につづくもので、博士人材が国際機関や民間企業で幅広く活躍できるための出口戦略を考えるものでした。

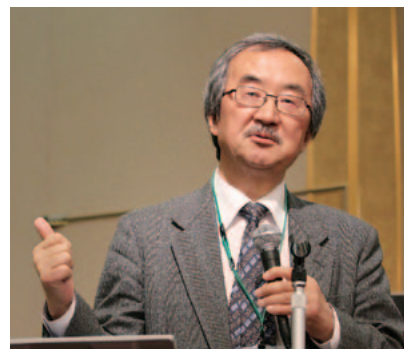
午前の第1部では、菊地久美子・文部科学省高等教育局大学改革推進室大学院係長と松尾清一総長の挨拶につづき、2つの基調講演が行われました。はじめに、加納敏行・NECブレイン・インスパイアード・コンピューティング協働研究所副所長が、「世界一流のプロフェッショナルを目指して」というタイトルで、国際社会で求められるプロフェッショナルについて語りました。話のなかで、エレベーターピッチ (Elevator Pitch) という言葉を使って、常に「30秒、200語で自分の考えのポイントをまとめる」ことの重要性を強調しました。つづいて、村田俊一・関西学院大学総合政策学部教授が、ESCAPや国連などの国際機関で働くには、どのような資質とキャリアが必要かを解説しました。村田氏は最初に、日本のコンビニで売られているさまざまな食料品を見せながら、それぞれの原産地がどこかというクイズを行い、こうした身近なことも国際機関で働く場合の基礎知識になるので、専門以外のことにも

幅広く目を向ける大切さを指摘しました。2つの基調講演は質の高いもので、参加者から面白かったという感想が多く聞かれました。

その後のパネルディスカッションでは、藤巻 朗・工学研究科教授の司会のもと、菊地久美子氏、加納敏行氏、村田俊一氏、松尾清一氏、神山知久氏、杉山 直氏がパネラーとして登壇し、活発な議論が行われました。PhD登龍門のコア・スポークモデルについても、スポークとしてあるいは資質のベースとして決断力が必要ではないかなど、さまざまな意見が出ました。

午後は、前島正義副総長の挨拶、杉山直プログラムコーディネーターによる今年度の登龍門プログラムの活動報告の後、3名の履修生が報告を行いました。報告は、2016年入学の第4期生の胡 安琪さんから始まり第1期生の藤井亮輔君という順であつたので、登龍門プログラムにおける履修生の成長具合がよく分かるものとなりました。履修生の報告に対して、国際アドバイザーボードの赤阪清隆氏、Matt Burney氏、Michael Bustle氏、トップリードートーク担当者の城所卓雄氏のコメントがあり、その後、総合討論に移りました。総合討論会のあとに、運営委員会と意見交換会が行われ、平成28年度の登龍門シンポジウムは終了しました。

(足立 守)



赤阪清隆氏



Matt Burney 氏



藤井亮輔君



写真左より、杉山 直氏、加納敏行氏、村田俊一氏、菊地久美子氏、松尾清一氏、Michael Bustle 氏、神山知久氏、藤巻 朗氏

グローバル人材の ための国際情勢講座

PhD プロフェッショナル登龍門では、東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社のご支援のもと、市民・学生向けに国際情勢に関する深い理解と正確な知識をよりわかりやすく提供する機会として、国内外の著名な専門家を招聘して連続講義「グローバル人材のための国際情勢講座」を開講しています。

今年度は、2016年12月8日（木）に、大和日英基金・事務局長のJason James氏をお招きし、「グローバル化の中での日本の大学と人材育成」、2017年1月31日（火）には、公益社団法人日本経済研究センター代表理事・理事長の岩田一政氏に、「2017年の世界経済の動向と日本に求められる対応」と題する講演をしていただきました。そして、今年度の連続講座の最後となる2月6日（月）には、1990年代からアフガニスタンの取材を続けるジャーナリストであり、女性の生活支援のためのハンディクラフト会社を立ち上げるなど起業家でもある安井浩美氏に、「アフガニスタンの戦後復興と平和」についてご講演いただきました。

各講演の後には、講演者とプログラム履修生との意見交換会が開催され、活発なディスカッションが展開されました。国際情勢講座を通して、グローバル人材として、さまざまな視点から「世界」の現状を考える機会となりました。

（古藪真紀子）



プロフェッショナル・ディベ ロップメントワークショップ

2月15日（水）、17日（金）に第4期生および21日（火）、22日（水）に第3期生を対象としたプロフェッショナル・ディベロップメントワークショップが実施されました。

このワークショップは、エディンバラ大学のJon Turner先生のご協力のもと、2013年度より登龍門の教育プログラムの一環として導入されました。前年度からはトレーニングを受けた名古屋大学のスタッフが登龍門の学生のニーズに合わせた4つの1dayワークショップを企画し、実施しています。

普段なかなか意識的にトレーニングされることのない、プレゼンテーションスキル、問題解決スキル、コミュニケーションスキル、セルフマネジメントスキルなどについて、さまざまなアクティビティやディスカッションを通じて学びました。履修生からは「他の学生からのフィードバックによって自分の足りていない部分に気づくことができた」、「こういった形式のワークショップは初めてで、自分の専門分野以外の学生と意見交換をするよい機会となった」、「博士課程における自分の目標について、再考するのに役立った」などの感想が聞かれました。

今後、海外研修や研究活動のなかで学んだスキルを実際に活用し、自分のものにしてもらいたいと思います。

（田中瑛津子）



グローバル人材候補生へのメッセージ

名古屋大学博物館 特任教授（元モンゴル大使）／城所卓雄

日本人で最初にアメリカに渡り、現地で学校教育を受け、グローバル人材となったのは、ジョン・万次郎として知られる中浜万次郎（以下、「万次郎」、1827～1898年）だと思います。彼は14歳の時（1841年）、仲間とともに漁に出て遭難しましたが、運よくアメリカの捕鯨船に助けられ、ホイットフィールド船長（以下、「ホ」船長）の養子となりました。

マサチューセッツ州のハーバーデンの学校では、英語、数学、航海術、造船業などを学び、その学校をトップの成績で卒業しました。それにもかかわらず、万次郎はその状況に甘んじず、学んだ内容を母国語で正確に表現できること、すなわち「自分は、もっと日本語を学ばなければならない」と強く思っていたことは特筆すべきことだと思います。

万次郎が日本へ帰国したのは、10年後の1851年でした。ちょうど黒船の来航で、当時の江戸幕府がアメリカの知識や英語力を必要としていたので、彼は江戸に上り、軍艦・造船の指導、測量術・航海術の指導などで活躍しました。最もよく知られている活躍は、1860年、日米和親条約締結のために、通訳として遣米使節団の咸臨丸に乗り込んだことでした。彼の語学力が最大限に発揮されました。

私がとくに履修生の皆さんにお伝えしたいのは、次の3点です。

(1) 万次郎自身は、英語はもちろんアメリカに関する知識・歴史もまったく有していなかったにもかかわらず、「ホ」船長の格別な配慮のもと、本人の並々ならぬ努力の末、アメリカにおいて日本人で最初のグローバルな人間になることができたということ。



(2) 私は外交官でしたので、その体験を通じて、①マスメディアの報道振りの翻訳・作成は、原文入手後1～2時間以内に終了させること、②一般の調査・報告書の作成は、指示に接してから1～2日以内に終了させること、③アポについては、現場には、必ず15～30分前に到着し待機すること、④在外公館の勤務時には、任国・地のみならず周辺国・地の事情・文化などについて可能な限り学習すること、同時に、訪問先の国名・地名やお会いする方の氏名の意味・語源なども学習するなどの“哲学”（自分としての方針）を養うことができたということ。これらの“哲学”は、PhD登龍門の履修生の方にも当てはまる事項であろうと思います。

(3) PhD登龍門の履修生の皆さんには、ご自身の研究・専門性をさらに高めると同時に、登龍門プログラム活動を通じて、恵まれた海外研修の機会やトップリーダートークなどでの出会いを積極的に活用し、グローバルで素晴らしいトップ人材になれることを、切に期待しています。



名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY

Message from Students

● 成功と失敗を積み重ねて



医学系研究科 医療技術学専攻（第1期履修生）／藤井亮輔

私が PhD プロフェッショナル登龍門に第1期生として参加し、3年半の年月が経過しました。振り返ると、複数の海外研修、トップリーダートークや社会人メンターなどさまざまな活動がありました。このなかでも昨年度実施した「登龍門プロジェクト（自ら課題を設定し、問題解決に挑む活動）」は、集大成にふさわしい活動でした。私は、数学・情報学を専門とするアメリカ人研究者のもとで、日本人集団を対象とした疾患と遺伝子情報との関連について解析する手法を学びました。今回の短期滞在中では、登龍門で培ったスキル（コミュニケーション・自己提案能力など）と研究能力を組み合わせ、1ヶ月間で英語論文を完成することができました。この活動では、異分野かつ異文化の環境でも問題解決に集中し、結果が出せるように成長した自分に自信ができました。登龍門ではこのような成功体験を（時には失敗も）積み重ねることができ、これこそ成長に繋がる鍵であると改めて感じました。さて、今年度は多くの第1期生が最終学年を迎えます。今こそ、各人の専門知識を生かし、登龍門の学生として社会の抱える問題にアプローチしていく時だと感じています。来春、新たな舞台でキラリ光る人材として活躍できるように、今年も成功と失敗を積み重ねてさらに成長したいと考えています。

● 持続的な発展に貢献できるリーダーになることを目指して

法学研究科 総合法政専攻（第2期履修生）／ガルトバートル・オヤンガ

グローバル化が急速に進展している現在において、発展途上国だけではなく、先進国にとってもこれから持続的に発展していくためには国際連携と国際協力が不可欠です。そのような背景のもと、高度な専門性・広い視野・国際感を持ち、持続的な発展の妨げとなっているさまざまな問題の解決に取り組み、国際連携を支えることができる人材になりたいと考え、登龍門プログラムに応募しました。海外研修で東南アジアの諸国が直面している問題を発見し、その解決方法を考えていくなかで、国際的なビジネス展開・国際連携の必要性を実感しました。そして、海外研修、コースワークで学んだことを通して、自分の国が直面している問題の本質をより深く理解し、物事を国際的な視点で見ることができるようになりました。また、JICAでの社会人メンタープログラムの経験から、国際協力の在り方を理解し、海外研修で来日している研修員と交流することで、コミュニケーション能力・異文化理解力を向上することができました。これからは、自分の専門である法律の知識と登龍門で身につけた能力を生かして、社会問題の解決方法を他国のプロフェッショナルとのコラボレーションを通して考えていきたいです。そうすることで持続的な発展に貢献できるリーダーになりたいです。



登龍門通信

2017年4月10日／第7号

編集・発行：名古屋大学 PhD 登龍門推進室
東山キャンパス 理学部 C 館3F 319号室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-5717
E-mail : 10ryumon01@adm.nagoya-u.ac.jp
<http://www.phdpro.leading.nagoya-u.ac.jp>